

1. 会長挨拶
2. 編集委員長の交代について
3. 2022 年度総会のお知らせ
4. 2022 年度全国大会のお知らせ
5. オンライン懇談会のお知らせ

会長挨拶

佐々木 和貴

日本も世界もほんの数年前までは予想もしなかった、先行き不透明な状況になってきておりますが、会員の皆様におかれましてはいかがおすごしでしょうか。

昨年、会長という重責を拝命して以来、今年の全国大会では会員の皆様に直接お目にかかれることを楽しみにしておりましたが、昨今の感染状況の拡大に鑑み、今年も9月18日（日）に、オンラインにて総会および全国大会を開催することにいたしました。大変残念です。ただオンラインには、PCさえあれば、全国どこにいても、各支部の優れた発表を居ながらにして聴講できるというメリットもあります。万障お繰り合わせの上、ふるってご参加ください。

戦争によって世界が、そしてコロナによってひとりひとりが「分断されて」いる今だからこそ、総会・全国大会は、例年にもまして重要な意味を持つと思います。17世紀英文学への共通の興味・関心を持つ全国の仲間が、オンライン上で「結びつく」場を大切にしてまいりましょう。そして、来年こそは会員みなさんと対面でお会いし、平穏な日々がまた戻ってきたことを一同で祝えるよう祈念して、会長挨拶とさせていただきます。

編集委員長の交代について

論集20巻『十七世紀英文学会における病と癒し』の編集委員長が諸般の事情により岩永弘人先生に交代となりましたことをお知らせいたします。

2022 年度総会および全国大会（第 11 回）のお知らせ

総会および全国大会を立正大学にて対面開催の予定でございましたが、7月下旬からの感染拡大状況を鑑みて Zoom による開催に変更することにいたしました。大会開催方法の変更につきましてご理解のほどどうぞよろしくお願いいたします。

以下に Zoom による開催方法を記載いたします。

日時：2022 年 9 月 18 日（日）14 時～ 17 時 00 分

* Zoom を利用したオンライン開催

参加方法

- ・事前申し込みは不要です。奮ってご参加ください。
- ・パソコン、スマートフォン、タブレットのいずれでもご参加いただけます。
- ・ご参加の際には以下の URL にアクセスしてください（必要に応じてソフトのダウンロードが始まります）。
- ・パソコンでアクセスするとお使いのブラウザが開き、「Zoom Meetings を開きますか？」というボックスが出ます。
- ・「Zoom Meetings を開く」をクリックすると会議室に入室できます。
- ・その際に「パスコード」の入力が求められますので、下記のパスコードを入力してください。
- ・途中での入室・退室も可能です。

参加 URL: 【省略】

パスコード: 【省略】

* 上記の参加 URL を SNS 等にご記入することはお遠慮ください。

* 非会員の大会参加を歓迎いたします。ただし、その際には会員が推薦者となり、事前に本部または各支部の事務局にご一報いただくようお願いをいたします。事務局より折り返し参加 URL をお知らせいたします。

2022 年度総会総次第

日時：2022 年 9 月 18 日（日） 14 時～14 時 30 分

* Zoom を利用したオンライン開催

【審議事項】

- 1 規約の変更
- 2 その他

【報告・連絡事項】

- 1 各支部活動報告
- 2 編集委員会報告
- 3 2021 年度会計報告（資料は当日）
- 4 その他

全国大会（第11回）プログラム

【開会のあいさつ（14:40-14:45）】

会長：佐々木 和貴

【研究発表（14:45-16:55）】

1. 14:45-15:25

Henry Neville と／のユートピア的衝動

川田 潤（東北支部）

司会：古河 美喜子

2. 15:30-16:10

ブルーム『スバラガス・ガーデン』における都市のランドスケープ

松田 幸子（東京支部）

司会：伊澤 高志

3. 16:15-16:55

“Let the stricken deer go weep”—『ハムレット』の諷刺詩人達

竹村 はるみ（関西支部）

司会：友田 奈津子

【閉会のあいさつ（16:55-17:00）】

事務局長：川崎 和基

研究発表要旨

Henry Neville と／のユートピア的衝動

川田 潤（東北支部）

17世紀後半、*The Commonwealth of Oceana* (1656) を著した James Harrington の盟友・後継者として知られる＜共和主義者＞Henry Neville は、近代国家に変貌しようとしていたイギリスの理想的／現実的なあり方について、複数の重要なテキストを出版している。Neville は、クロムウェル政権の重要な一員になったかと思えば、政権から排除・迫害され、王政復古後にも、いくつかの陰謀に関わったとして拘束されるなど、波瀾万丈の人生を送った人物である。そのような Neville の著したテキストは、自由、所有、責任、権力などを鍵語として、個人と共同体の関係性を模索する。

本発表では、めまぐるしく変化するイギリス、オランダ、フランスの国際関係を考慮に入れつつ、王位排除危機の最中に出版された *Plato Redivivus* (1680) など、いくつかの Neville のテキストの共和主義的言説の特徴／変化を、この時代のユートピア的言説／衝動との関係で考察することを目的としている。更に、可能であれば、このような Neville 的な＜共和主義＞が、名誉革命を経て 18 世紀に「帝国化」していくイギリスの政治／文化と、どのような連続性／断絶があるのかについても明らかにしたいと考えている。

ブルーム『スパラガス・ガーデン』における都市のランドスケープ

松田 幸子（東京支部）

リチャード・ブルーム (Richard Brome) による『スパラガス・ガーデン』(*The Sparagus Garden*, 1635) は、ロンドンに実際に存在した遊園 (pleasure garden) であると考えられるスパラガス・ガーデンを中心に展開する喜劇である。1630 年代に登場した場のリアリズム喜劇 (place-realism comedy) に位置づけられるこの芝居は、対立する二人の治安判事の息子であるサム (Sam) と孫娘である (Anabella) の結婚を成就させるまでの騒ぎをえがいており、その中でスパラガス・ガーデンという空間は、登場人物たちが行き交い、衝突し、そして思いがけなく和解する、交渉の場として機能している。本発表では、場のリアリズムというこの芝居の形式に留意しつつ、同時代のロンドンに存在していたと考えられる遊園とはどのようなものであったのかについて考察する。そうすることで、『スパラガス・ガーデン』が提示する、1630 年代の都市空間とそこでの人々の交わりのありようを明らかにしたいと考える。

“Let the stricken deer go weep”—『ハムレット』の諷刺詩人達

竹村 はるみ（関西支部）

16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて、競合関係にある詩人たちが作品を通して相手を罵倒する風潮が生じた。俗に「詩人戦争」あるいは「劇場戦争」と呼ばれるこの現象は、中傷詩の流行をめぐるより大きな文脈に位置づけて考察する必要がある。近代初期における誹謗中傷の格好のメディアは、エピグラム、バラッド、そして演劇だった。中傷詩と総称されるこれらの作品群は、諷刺文学の変容との関連で、近年新たな批評的関心を集めている。諷刺文学は誹謗中傷との線引きが時に曖昧となるが、そうした攻撃的な諷刺文学が台頭したのが 1590 年代だった。これを取り締まるべく 1599 年には禁書令が公布されるも

の、中傷ブームは収束の兆しを見せるどころか、激化の一途を辿ることとなる。
本発表は、1601年のエセックス伯蜂起の前夜、宮廷を発信源とする誹謗中傷合戦がロンドンのそこかしこで繰り広げられる中で執筆された『ハムレット』には先鋭的な諷刺文学の傾向が見られることに着目し、エリザベス朝末期に顕在化した都市文学の系譜に本作品を位置づけることを目的とする。シェイクスピア劇の登場人物の中でも屈指の毒舌家として知られるハムレットの機知を文化史的な観点で考察したい。

オンライン懇談会のお知らせ

日時：2022年9月18日（日）17時15分（予定）から18時00分ころまで
* Zoom を利用したオンライン開催（URL・パスコードは総会・大会と同一です）

総会・大会の終了後にオンライン懇談会を開催いたします。飲み物でも片手に、近況報告や情報交換をいたしましょう。どうぞ、ご自由にご参加ください。

各事務局の連絡先

* 学会ウェブサイトの「学会・支部案内」のページをご覧ください。